

1. 実施概要

(1) 日時：平成24年10月9日（火） 14：00～16：30

(2) 場所：天文館シネマパラダイス

(3) テーマ：「観光・商業・交流によるにぎわいのあるまちづくり」
～中心市街地内の回遊性向上に向けた取組～

(4) 進行

14:00～14:05 開会

・開会の挨拶 鹿児島市長 森 博幸

14:05～14:20 基調講演

・東京大学先端科学技術研究センター教授 西村幸夫

14:20～14:40 中心市街地活性化及び地域活性化に係る施策紹介等

・内閣府地域活性化推進室次長 横山典弘

・国土交通省都市局まちづくり推進課長 清瀬和彦

14:40～15:10 参加市長からの事例紹介

・北九州市長 北橋 健治

・下関市長 中尾 友昭

・鹿児島市長 森 博 幸

休憩（10分）

15:20～16:25 パネルディスカッション

・コーディネーター：西村幸夫教授

・パネリスト：上記市長3名、WeLove天文館協議会会長 牧野繁

16:25～16:30 閉会

・閉会の挨拶 内閣府地域活性化推進室次長 横山典弘

2. 開会の挨拶

- 全国で開催されるこのリレーシンポジウムの皮きりとして、今回鹿児島市で開催できることを大変嬉しく思う。このような機会を得て、今鹿児島市が積極的に取り組んでいる中心市街地活性化や今後の他の都市の参考になっていければと思う。
- 本市の中心市街地は、南九州随一の繁華街として発展をしているが、モータリゼーションの進展や大規模集客施設の郊外への立地等により、歩行者通行量の減少や空き店舗等も増加。このような中、平成19年に認定を受けた基本計画に基づき、各面からの施策を積極的に展開。そしてそれらの取組や成果を通して、行政と民間が共通の目標に向かい一致団結していくことの重要性を改めて実感している。今後に向けて、さらなる賑わいと活気にあふれるまちづくりを推進するために、第二期基本計画の策定に取り組んでいるところである。



3. 基調講演の概要

- 日本の都心が一番元気だったのは1960年頃。都心でしか買えないものがたくさんあった。その後自動車が普及して居住地が郊外へ移り、そこに施設も張り付く。1960年代まで小売のトップだったデパートが90年代にはコンビニにその座を譲り、買い物はかつての文化から“時間の節約”になった。都心は地価も高いことから、空き地や駐車場がどんどん増えていった。これは普遍的な問題であって、特定の市だけの問題ではなくなってきている。
- 中心市街地の活性化に必要なのは、まず郊外の商業立地の抑制。しかも広域調整をしなければ雇用や税収の機会も奪われてしまう。次に都心へのアクセス向上のための公共交通機関の拡充。そしてこのような大きな施策と並行して、今回のテーマでもある都市の魅力の再生、再発見、さらに都心の地域経営戦略を再構築することが必要となってくる。
- では都心の魅力を再生するためにどうするか。まずは文化の中心としての機能を見直すこと。次に長い歴史の中心としての蓄積を生かすこと。さらに映画館や祭りといったアクティビティの中心としての強みや個性に磨きをかけることが必要で、そのためには様々な実験をうまく繰り返していくことが大事。鹿児島の場合では、学生たちが様々な建物を魅力的に改修する実験的な試みを行い、1週間で3千人の来場者を集め、まちの回遊性も高めた。こういう取り組みが都心が甦ることにつながっていくのだと思う。



4. 施策紹介

(1) 内閣府より

- 中心市街地活性化については、平成18年に改正法が施行されて国の認定制度が入り、これまでに107の都市が認定されている。また以前から取り組んでいるものとしては地域再生制度、構造改革特区制度があり中心市街地活性化施策と連携して進められるものがある。
- 経済産業省、国土交通省、総務省が中核をなしつつ施策を進め、経済産業省では施策のひとつの戦略補助金を抜本的に見直し、まちの魅力を高めるための知恵の掘り起こし、民間では取り組みが難しい実証的な取り組みに人材支援を含めて支援をしていく。さらに人材育成や成功・失敗事例の共有を行う事業もある。
- 総務省ではハード、ソフトの事業について特別交付税措置を含め支援をしていく。



(2) 国土交通省より

- 国土交通省では、都市機能の集積を促進するために「暮らし・にぎわい再生事業」として、病院や文化施設等のまちなかへの立地の支援、空きビルの改修コンバージョン、多目的広場の整備等を、また「まち再生出資業務」では優良な民間都市開発について金融支援をしている。



- 「まちなか居住の促進」では、中心市街地の共同住宅の供給、居住再生ファンドで金融の面から支援。さらに土地の成形・集約化として、区画整理事業の中でも中心市街地の中に特例を設けるなど支援。また「身の丈再開発」として、過大な投資にならないような再開発についてより重点的な支援措置を講じている。
- まちづくり交付金、都市再生整備事業の中で、中心市街地では40%から45%への補助の拡充や提案事業の枠の拡大など強化を行っている。さらに公共交通の増進、民間まちづくり活動支援でソフト事業の支援等、国交省として様々な支援策を行っている。

5. 事例紹介

(1) 北九州市

- 「世界の環境首都」という市民を鼓舞するスローガンを設けながら、小倉、黒崎という東西2ヵ所において中心市街地の事業に取り組んでいる。
- 小倉地区では、国道上をつなぐエコに配慮したジョイントアーケードをつくり、にぎわい回遊づくりを進めている。また小倉駅の近隣に心臓外科では世界的に有名な小倉記念病院が移転し、大きな活性化になっている。屋台村もこのたびスタートするなどあらゆる努力をして都心のにぎわいづくりに取り組んでいる。またアニメやコスプレ、お笑いなど若者のサブカルチャーを集めた施設「あるあるCity」は、有名アーティストの協力のもと官の施設である「漫画ミュージアム」も入って大変にぎわっており、官民が協力してにぎわいづくりを進めている。
- 黒崎地区では、マンションや公園などの充実のほか、スイーツに特化したチャレンジショップをつくっている。8年間空きビルとなった場所に区役所や人材育成をコンセプトとした様々な施設を結集させることで来年春オープンを予定。また、図書館やホールもつくり、既存商店街が元気になって欲しいということで目標達成に向けて努力をしている。



(2) 下関市

- 下関駅周辺の魅力づくり「下関駅にぎわいプロジェクト」として、民間主体の開発ビル、シネマコンプレックス誘致を行っている。開発ビルは1・2階はテナント、3階部分は市が購入して次世代育成支援の拠点施設が入る。
- 「国際通り整備事業」では、下関駅周辺のにぎわいを創出するため、まちづくり交付金を活用して商店街入り口の韓国風楼門をはじめとした賑わいづくりの整備を行ない、韓国の食や文化との結節点であるグリーンモール商店街と韓国釜山の商店街「国際市場」との姉妹締結を行った。これにより下関駅とグリーンモール商店街との回遊性の向上が図られている。また北九州市をはじめ近隣市町からの買い物客も訪れており今後に期待している。
- 唐戸地区の活性化策として中心事業である「あるかぼーと開発事業」ではアミューズメント施設の誘致、芝生エリアの整備、飲食店の誘致等、地域を3つのゾーンに分け、唐戸地区



から生まれるにぎわいを下関駅前地区へと結びつけることで中心市街地全体の活性化を図っている。またにぎわい創出の社会実験として「海峡軽トラ市場 in しものせき」、下関の味を中心とする「海峡屋台村」などを展開している。

(3) 鹿児島市

- 「まちなかのにぎわい創出と回遊性の向上」として、鹿児島中央駅周辺地区では、商業・業務・住宅機能を備えた2つの再開発ビルが整備されたほか、都市間高速バスのターミナル、ホテル業務など複合機能を備えた鹿児島中央ターミナルビル、鹿児島の食を楽しめる屋台村の整備などを行っている。
- いづろ・天文館地区では、三越鹿児島店閉店のあと商業交流施設として「マルヤガーデンズ」が誕生し新たなまちの魅力となっている。また「LAZO表参道」は新たな交流拠点として今年5月にオープンした。さらに、都市施設等のライトアップを行うファンタスティックイルミネーション事業や冬季光の回廊事業は、夜の景観とにぎわいを創出している。
- 「九州新幹線の開業効果を活かした観光の振興」としては、本市最大の観光資源、桜島の溶岩なぎさ公園に全長100mにも及ぶ足湯を整備し、雄大な眺めと温泉を楽しめる施設となっている。
- 甲突川では、新幹線で中央駅に來られた方々や市民の皆様が散策をする仕掛けづくりとして、明治維新で活躍した多くの偉人を輩出した甲突川左岸に、歴史を感じながら散策ができる“歴史ロード維新ふるさとの道”の整備を行った。また右岸には観光交流センターやウッドデッキ、オープンテラス等を整備した。これらの施設を整備したことによって観光客も増加し中心市街地にもにぎわっている。
- 「南九州随一の中心市街地の商店街の活性化」としては、天文館ショッピングモール化のために本市では、商店街が実施するテナントミックス事業やにぎわい創出事業への支援を行っている。We Love天文館協議会では、特徴的な取り組みとして、商店街や百貨店などが組織の枠を超え連携協力しながら各種イベント等を行っている。



6. パネルディスカッションの概要

《回遊性の向上について》

- (北九州市長) 都心・副都心に人を集めようと、若い女性の方々が歩いてランチマップを作って配ったり、“街コン”を開催したり、市民の間から寄せられたいろんなイベントが自発的に始まっている。非常に心強く感じている。協議会でいろいろ議論を重ね、数値目標をたて、みんなで達成するという問題意識の共有があり、出発点からみんなで議論してきた蓄積がある。
- (下関市長) お隣である大都市圏の北九州市をはじめ、市外県外から私たちの地区に行ってみたい、面白そうだ、美味しい物があるそうだというイメージをつくることが重要だ。水族館や観光魚市場、寿司などで有名なグルメの人気スポット唐戸地区から隣接するウォータフロント地区のあるかぼーと、さらに門司港レトロとの交流を高めていきたい。今回誘致する

遊園地は入園料をとらないなど、子供や孫をつれた家族が散歩感覚で利用できるところになっている。

- (鹿児島市長) 歩いて回遊できる仕掛けづくりと公共交通を活かしたものと2つのテーマがある。甲突川周辺リバーサイドの整備や、中央駅から天文館地区へつながる清滝川に遊歩道を整備したほか、それぞれの地域に設置した観光オブジェを見ていただきながら回遊できるようにしている。天文館地区では全長3 kmを超えるアーケード街や、観光ボランティアガイドの案内による“鹿児島ぶらりまち歩き”もある。交通機関では、電車軌道の緑化を行い、環境面だけでなく来街者の目に潤いと安らぎを感じられるようにした。さらに本市には、電車・バス・フェリーがあるので、これらを連携活用することで観光客が気軽に街なかを散策できるようにしている。今後は、ウォーターフロントにまで足を伸ばせるようにして、錦江湾も回遊できるようにするなど、回遊によって魅力を再発見できるような取り組みをしていきたい。
- (西村教授) 電車軌道の芝はとてもきれいだが何か秘訣があるのか？
- (鹿児島市長) 鹿児島特有の芝を用い、土にはシラスを使い、鹿児島の気候にもマッチしているからだと思う。
- (天文館協議会会長) 多様な主体が参画するWe Love天文館協議会ならではの取組として、それまであまり前例のなかった百貨店同士の連携や、百貨店と商店街との連携が始まり、販促イベント等を実施してきた。また、市電無料の日やワンコインの日を設定したところ、電車利用の来街者が増えた。また、にぎわい創出のための色々なイベントを行い、鹿児島中央駅地区からいづろ・天文館地区への回遊性を高めてきた。

《にぎわい創出について》

- (北九州市長) きらりと光る街の魅力を内外に発信できるものは何か、過去の歴史をふりあえて“エコ”ではないかという結論になった。修学旅行のエコツアーでは、まちなかにあるいろんなアイデアを活かしたエコの施設が見られる。世界で4つのグリーン成長のモデル都市のひとつにもなっているので、エコでがんばりたい。また食をテーマにしたもの、すでに100万人が訪れた「あるあるCity」のようなサブカルチャーなど、若者や女性の発想も大事にしていきたい。
- (下関市長) グリーンモール商店街は韓国、中国への国際定期フェリーがあり、とくに韓国釜山航路は100年の歴史がありまた距離も近いということから韓国色を活かしたまちづくりをして観光の拠点にしている。また高齢化に対応した唐戸地区の活性化、さらに商店街の空き店舗対策等の紹介があった。地元ゆかりの詩人・金子みすずに関連したアイデアを用いて、他所で人気のスタンプラリーはどうかとの意見がコーディネーターより出された。
- (鹿児島市長) にぎわいの拠点づくりとして、LAZO表参道やマルヤガーデンズの整備があげられる。マルヤガーデンズは、素早い対応を行ったところ、多くの来店者を集めており、



歩行者通行量も増えている。また、空き店舗対策としては、商店街が取り組むテナントミックスに対して支援を行っており、若干ではあるが空き店舗率が下がってきている。食をテーマとしたまちづくりにも取り組んでおり、鹿児島は、黒豚、黒牛、焼酎など食の魅力が豊かだ。地元食材を使ってもてなす屋台村が整備され、多くの人を訪れている。さらに、美味維新として、鹿児島の味を楽しむイベントを四季折々に開催しており、これも多くの人で賑わっている。取組にあたっては、県内だけでなく、東京や各都市在住の方々の“外から見た鹿児島”という観点からいろいろな意見を得ながら進めている。

- （西村教授）屋台村の成功の経緯についてはどうか。
- （鹿児島市長）屋台村では、鹿児島の食材を使った24店舗の異なる味を一カ所で味わえる魅力あること、店が小規模で店員や隣の客との距離感も良いことがあげられる。
- （天文館協議会会長）にぎわい創出の施策としてイベントの実施、天文館ブランドの確立、個店の魅力アップ作戦という3方向で取り組んでいる。イベントについては、大きなものを季節ごとに、小さなものはこまめに実施している。30代、40代の若い世代が中心となって企画実施しており、若い発想も良いようだ。“みつばちプロジェクト”を立ち上げて、天文館にしかないブランドの構築を図っている。さらに消費者目線でのリサーチを行う等、個店の売上につながるような魅力アップに努めている。九州新幹線でつながっている福岡市、熊本市などの他都市や、県全体での商店街の連携を目指している。九州新幹線開業において、鹿児島中央駅周辺と天文館商店街とで競争しあうのではなく連携して回遊させることが大切である。

7. 閉会の挨拶

- 本日は創意工夫にあふれる様々な取り組みについて、幅広いご紹介と意見交換をいただいた。様々なキーワードがあり、民間の取り組みなども勉強させていただいた。国においても、今後の中心市街地活性化施策の検証作業に活かしていきたいと考えている。
- 本日に至るまでご尽力いただいた鹿児島市をはじめ遠方よりご出席賜った北九州市、下関市の皆様、関係機関の皆様、地元関係者の皆様に心から敬意を表するとともに、ご当地鹿児島市をはじめ皆様方がますます発展されることを祈念申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

